

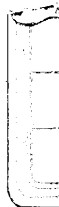
ロータリー川柳

一句集

握手



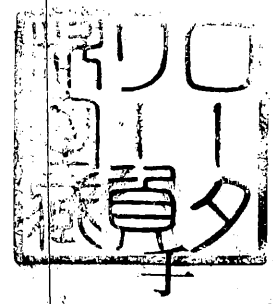
山中鹿之助著



白河 R.C.

ロータリー川柳句集

握



山中鹿之助著

我等の生業

- 1, 我等の生業・さまざまなれど
集いて図る・心は一つ
求むるところは・平和親睦
力むるところは・向上奉仕
おうロータリアン・我等の集い
- 2, 奉仕に集える・我等は望む
正しき道に・果をとるを
人の世挙りて・光を浴みつ
力を協せて・争忌むを
おうロータリアン 我等の集い

序

雨が降って居る。

春は、思い出の日を雨だれの音のように、次から次へと懐かしい音を立てる。過ぎた日の思い出は楽しい。

そうした意味から、この句集は私のロータリー生活のメモであつたり、日記であつたりするクラブのチャーター・メンバーとして、ロータリー仲間と共に楽しく睡み合ひ、微笑み合つてもう五年の長い時間を手を組んで過して来た。

思えば遙かな日である。

その間、さまざまな過去の姿をロータリー手帳の片隅に、時に触れてメモして来た川柳が積み積って巷千五百首も越えてしまつたが、その句を皆が皆このパンフレットへ盛ると云うことは、到底不可能のことである。

この日記に録した句は、私の敬愛する醸造家の大木代吉さんが会長で、私が幹事を努めさせて戴いた一年間の収穫をテーマとして編んだので、前後を通じて五年間のうち四ヶ年に渉る句は、そのまゝ手帳に残っている訳である。是等

は次の機会に集に編みたいと思つてゐる。

私の一番楽しかつた幹事時代の一年間を記念する為に、川柳らしからぬ川柳を見て戴くと云うことは、相当の強心臓であろうことは、私なりに自覚してはいるが、只この句集によつてブフツと笑つて戴きたいと云うのが山なのである。それらは要するに、川柳物語と云つた方が適當かも知れない。それに私の娘・順子がこの三月に結婚生活に這入つたので、それも合せて記念にして置きたいと慾張つた話である。

X

X

さて、出来上つて見ると、どれもこれも意に満たない句ばかりとなつてしまつたが、推敲するいとまとてなまゝに、その儘にそつとして置くより外なかつた。

要は、私のロータリー日記であり、過去へのメモであつたりして、悔いなし私の生活の断面をそつとお知らせしたまでのことである。

一九六三 三・一五

鹿之助

小 序

父の句集『握手』が発刊された。父は多くの名を持つて居るので、本来の名を知る人は余りない。本当の歳を知つてゐる人も少ないらしい。或る人は、七十五才と言ひ、或る人は、四十才らしいと言ひから愉快である。舐めるようにお酒を飲んで居るときは、いよいよ顔に艶を増し話題が豊富でこれは二十代のもの。そこに本来の父の姿を見ることが出来る。

内心寂しいことがあつても、それは川柳や俚

語などに現れるのみで、話しては決して人を怒らすようなことが全くない。斯うした心の豊かさが句を作り、ひとり楽しむことによつて、若さがあるのではないか？ この句集の冠頭をかりて、いつまでも若く、趣味に生きる楽しさを持ち続けて貰いたいと書き添える。

『握手』とは、to clasp each other's hand as a token of agreement or friendship, or in party or greeting. とあつて、別れとか挨拶の際にも互いの手を握ることだ、句集の『題名』として如何にもロータリマンらしい。

×

この句集以前に、句集『微苦笑』を発刊して居る。内容の大部分がロータリー・クラブに関する句が多い。それにしても、是等を通じて父の思い出を呼び起すなら、読書三昧の生活であり、句に生きた半生でもあった。

私は、この土地の病院につとめて、二年間を一緒に暮したが、読書慾の溢勢には驚ろいて居たが、この点、私の勉強の刺激にもなつた。夕方ともなれば、お定まりの晩酌が始まる。少しばかりの風に乗つて、山ざくらが落花する。そ

の花びらを盃に受けて嬉しがる風流の父でもあった。

ロータリアンとしての父。他人の身になつて奉仕すると云うロータリーの精神を、私に話して呉れる。そんな時の父は、若さと情熱とが一杯い。私は、ロータリーに心からの感謝を、父の為に捧げるのである。父のロータリーの句が多くのロータリアンも微笑んで読んで戴けたら、父は大満足して顔をくずして喜ばれることであろう。

友情に厚い父、娘に甘い父。どこへ行くにも

母と一緒に出かけるのだが、私は微笑ましく見送る。それらは私達夫婦へのより良き教訓となつて居る。

誰にでも思いやりの深い父。私達夫婦はロリータリーの精神に徹する人達と共に、その父に、心からの感謝を捧げて、発刊を祝す次才である。

三八五・一〇

喜久男
順子

ロリータリー川柳

握手

一句集

この小著を
未来の友
親しきローターリアンに捧ぐ



ローターリーの春

— 新年宴会 —

落葉した冬樹にもまだ新雪が残り、冷たい冬の風が吹きまくって居るとは云うものゝ、どこか春の息吹と云うものも感じられて、新しい年を迎えるのであった。

X

おめでとう
去年の顔がみんなより

欠けなしの
例会春らしいにぎやかさ

おめでたい
顔でロレツもおめでたい

春の服
樟脳の香を振りまわし

二次会は
親睦委員が役につき

お帰りは車
春の月窓に笑み

閉会は
せずに別れる右左

テーブルの花も
香やかに笑みかける

血圧が高い
ビールで春祝う

酔いませしよう
そうしまししようと手を握り

書記さんと訳し
幹事として稼ぎ



メイトルが除々に上昇して、混声合唱団が始まったよう。
会場は、まさに騒然。でも、片隅でひそひそと話し合ってる人も居る。

×

ローゼリー

飲んだ話へ妓が真面目

青汁が
きいた社長は艶々し

商売を
隔れてなごむロータリー

それでこそ
ロータリーなど手をのべる



—新年才二例会—

先日は

失礼そんなに酔ったかな

会長の報告

紋切型で終へ

春の陽は

まだ遠く居て炉が燃える

幼な名で

呼んで思ひ出の日が還る

食事後の

眠けに春は一步づゝ

どの顔もポカン
例会の鐘でさめ

ストーブのジョーク
例会より親し

ピジターも

眠そうつまらない報告書

出席は満点で
祝酒が湯気を立て

一番になれば
決心の腹を見せ

(会長決する処あり)



新会員を迎へる

歓迎の

微志へ一本だけつける

名会長

腹を割つての迎への辞

ひとしをの
感激拍手して微笑

この上は
どうぞ新会員の卓話

酒さかな
花見のよりに賑いちらし



ロータリー
— お花見 —

さくらさくら
それよりは酒と妓のお酌

打ちつれて
妻を見返る花の宴

気兼ねした妻
今日こそ天下のロータリー

酪農講習所附近のさくらは
七分咲き
三々五々夫人を引具して、
会員も楽しそう

お手前も
済んでくつろぐ花むしろ

— 研究室 —

人工授精

但し牛のことゝ念を押し

顕微鏡

居る居る牛の子の動てゐる

精液は

百倍・うすめても牛はらみ

お手のもの

肉焼け始めバーベキュー

〇 夫人大いに働く

何もなし

だが酒だけなどはとて

どうでしょう
私の腕と夫人言ひ

満開に
早いさくらの下の酒

見はるかす
千里のはての牧草地

菜の花よ
こゝロータリーの家族づれ

ほろ酔いの
顔寄せ合つてバーベキュー

春のかぜ
ロータリアンをくすぐらせ

— H 所長 —

独り身の気易さ
さくらばどうでも良いお酒

牛どもと
暮し余生も牛と生き



何時の間にか自然は、みどりの粧いを
こらして、どこも、こゝも、生きる力
の満ち溢れた姿となった。



どこからともなく、ほととぎすの初啼
きも聴こえ、あやめも紫の夏衣を着
て、みどりの中にほく笑み始めている。
吾々のくらしも、一枚一枚と下着から
脱き始めて、心も姿も何となく軽やか
な気分にならぬ。

やがて、しとしと、屋根を打ち、かけ
ひを伝う雨の流れの音も親しみ深く、
一夜を静かに盃を傾けて聴き入る――
楽しい夜もある。

又ある者は、葉ざくらの山の姿をあか
ず眺めて、花見の宴を取り逃がした
その埋め合せに、若草をしとねとして
家族を引き具して、楽しむと云う風流
一家も見出されて、みなそれぞれに、

職域に奉仕するその余暇を割いての試
みとあらば、自ずと心温まる人生では
ないか？
こゝろ豊かな人生。人の身になつて考
える人生。何と美しい響きではない
か？





夏のロータリー

会長のきも入りで醸造元から
特選の冷用酒金色に光る

ビールでは

キキが悪いと冷用酒

病欠の友例会へ出席

全快の祝辞

一本で祝い

昼食のおとも

一本ではこと足ず

挨拶は

まずお天気から事はじめ

欠呻して

それから両手に空を切り



ガバナー公式訪問

(二六二一・二五)

それ報告書だ、決算書だと書類の作成
と企画。年次計算など資料を引つ張り
出して、不備な点は作文をして辻つま
を合せる小学生の宿題そこそこの騒ぎ
で、佐々木ガバナーを迎える。

×

ガバナーは
神さまでないことにする

会長幹事会談

ガバナーを囲み
もう来る春のこと

ガバナーのジョーク
会長ホツとする

ガバナーよ
汝人間として睡み合い

会長と幹事
見合はせてホツとする

これからは
ガバナーでない呑み仲間

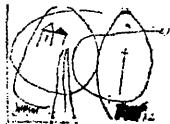
静かなる
夜はしとしと、冬の雨

暖冬のせい
ワイシャツで飲み始め

お帰りは
せめて旗なりとロータリー

ガバナーと
日向をかこむ良い日和

さしのべた
ガバナーの手も皺がみへ



小家族会

(一九三三)

さくらもまだ唇を固くとじて笑はうと
もしない。

だが、日本武士たるロータリアンの意
気は天を呑むの慨がある。花が咲こう
が、咲くまいが、一日の歎をつくすに
自然が与へてくれた天の美緑が待つて
居る。まして、最愛なるもの妻への

サービスも斯のような時でこそあれ。
とばかり、そろた、そろたよロータリ
アンがそろた。

×

惚れ惚れと
妻見返つてヤニさがり

御亭主も知らぬ
愛妻の酒の量

愛妻の
呑みつ振り関白怖気づき

妻として酔ふば
きならぬの青い月

たちまちに
喰い荒されて膳が泣き

飲み足らぬ
ひとを残して家族会

例会は
まア簡単にして終り

テーブルの
花片よせてビール党

血圧が高い
ビールで間に合わせ

広がれまわれ
手に手つないで会終り

晩酌は
しらなしましよと妻は言ふ

新顔も見えて
ヤアヤアと家族会



東北ポール
工場見学

(一九六・五・二〇)

八重の咲き残り桜、ちらほら。

菜の花の中から雲雀が、これがこの世
の楽園とばかり、唄つて唄つて、唄い
まくる。

どこかのんびりとした野の歌も聴え、
こゝは郊外の大工場。コンクリート・
ポール。パイルの製造工場。大グレー
ンが、青空の中に悠然と浮んで居る。
尾崎社長さん大いに張り切つて、ロー

タリアンの一人一人に、その製造工程を説明する。ロータリアンの一人が、ポールも入浴すると言うことになる、人間をみだわい……。



『ポール』

一本が
儲けの額(允)を胸で読み

これだけのポール
儲かる値をかぞへ

工員の
みなほがらかに笑み迎え

〇社長
苦心ばかりを話しかけ

電柱も
養生をする露天風呂

水槽に
ボールが眠る良い日和



東北ボールの
招宴

若葉が一つばい。そよか
ぜも静かに…………。

— 一九六・五・六 —

湖の彼方に、五月の陽を浴びて、野鴨
たちが楽しそうに泳ぎ廻る。

松林の中では、ほろほろ、やまがら、
るり、きびたきなどの小鳥たちが青
空をのぞき乍ら唄を止めない。

この日は、東北ボールの尾崎社長さん
の南湖畔「料亭」にて、招宴が催され

た。どの顔も明るい楽しそうなロータ
リアンが揃った。



見学も終へて
くつろぐ春の宴

どの顔も
満足そうで——ロータリ—

酔うほどに
ロータリ—賞めポール賞め

かぜ南
酔顔によす波の音

ふくらんださくら
この日の幸に笑み

波の音
水鳥の恋讃える日

ロータリー
こゝでも手に手……会終り



ロータリー東京大会
— 拾 遺 —

ロータリー史以来の盛会で、この日を期して海外よりのロータリアンは、七千三百名であつた想だが、そのうちの一人・アメリカのダンラップさんが、白河ロータリーの例会へおとずれられた。

— (五・三五) —

×

青い目の客は
ウイルカム例会日

(古城趾を案内)

句碑を指し

判らないなと首を曲げ

ようこそと

握手それからがどうも

手で話し
身振りで語り恙なし

何もかも

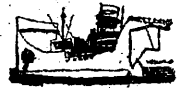
笑つてばかりそれで良し

片ことの

日本語一ツコンニチワ

通訳が
古蹟の訳に口ごもり

ようこそと
ほくえみかわす楽しい日



ダンラップさん
歓迎パーティー

(矢吹、大木氏別荘にて)

刺身とは

妙な？サラダかとたづね

驚つかみ

箸は二本に分れかね

お座りは上手
座布団をなせまわし



家 族 会

若葉のそよ風を切つて鮎のすがたを心
に浮べてロータリー家族会は、烏山町
まで足をのばした。六月二十日。
青空の白い雲も二つ、三つ……

×

どの顔も
包みきれない目がひかり

自家用車

まづ金もちの音を立て

御夫人は

亭主を引いてロータリー

『山と水』

手まねくように瀨に騒ぎ

後塵をおがみ

二番—三番車つゞき

鮎下げて

続く夫人へ青嵐

くゆらした煙草

屋形(船)を遣いまわり

静かなる流れ
喰はれる鮎が跳ね

婦唱して
亭主が続く鮎の籠

自家用車
さつそうとして妻が乗り

家族会
酒がひき出す黒田節

釣り上げた
鮎はこの世を去つてゆき

御夫人を
床の間に据へや下り

クラクション
鮎だ鮎だと土けむり

会費だけ
喰つたと夫人族御満悦

友情の橋は
鮎の味人の味

落ち鮎は
良いナ九月とは待ちかねて

— 雑詠 —

(会員の誕生日を祝う)

誕生日
ビールの栓が冴えた音

もりあがる
泡へ誕生の夜のまどろ

満ち足りて
夜の盃に夏迎う

生もなく
死もなき蕩然とした例会日

— ゴルフ —

笑つてはならぬ
キヤデーのオ一課

地球など
少しけすつて汗をふき

御自慢のクラブ
地球をちと削り

クラブ振る
芝草を分け虫が鳴き

一粒の汗が
お高い値でこぼれ

耳掻きで
球を擲うてうれしがり



初秋の例会風景

居眠りの頭へ
風が少し吹き

夏バテの例会
欠伸がこゝかしこ

どの顔も
ぼんやり目がすわり
われとわが
音痴のソングに拍手する

会報の苦心
自慢とまませ合せ



アッセンブリー

仙台（二空三ホス）

国訛り

まぜて標準語追いつけず

よそゆきの口調

マイクを間違つかせ

標準語

なまりが少うし可愛ゆらし

国訛り

標準語などツマに入れ

時間切れ

まだしゃべりたい顔が浮き

訳語では
判らぬ 英語なら判り

協議会

愚問愚答で腹が空き

退場を

酒と肴で喰い止める



バーベキュー

郡山クラブと合同
(南湖々畔、松林にて)

松風に乗つて

羊の肉が焼け

松林

妙な香いと犬が言ふ

バーベキユー

日陽をさがす良い夫婦

林では

ジングスカンが泣き始め

唄声が

松間を分ける風に乗り

野の料理

秋陽ひそかに歩を早め

そよかぜも

ジングスカンの炉を訪ね

妻具して

林に睦むバーベキユー

友情の橋は
炉火から炉へかゝり

松の蔭

ここにも野の炉へ肉が焼け

逝く秋を

惜しむ目に澄む青い空

ロータリー

集う樹の間に燭もつき

連れ立つた

妻いたわつてパーベキュー

秋草を

敷いて『それでこそロータリー』

松林

秋と手を組む家族会

逝く秋を

惜しむ那須ヶ峰(お)に白らもの

肉が焼け

亭主へ一箸だけつまみ

それではと
妻の食慾のお見事や



家族会（バーベキュー）

エックス，カーション

— 国営南湖牧場見学 —

ロータリー

来たナと羊尻を向け

青草を

追うて羊の陽をさがし

今喰べた

ジنگスカンよと子に教へ

自家用車

羊ふしぎな目で迎へ

銀杏はらはら

ロータリアンに降り

牧場の径

穂すゝきがゆれ草がゆれ

この羊

ジギスカンとなる定め

—帰路を急ぐ—

満腹に

風冷えて来る家族会

妻の手の温み

バスまでの道の中

パーベキユー
話題が多いバス振れる

それからの
妻見直して家族会

西山の方へ
オテントサマ急ぎ足

さよりなら
また逢りまでの手をつなぎ

空からの続き
秋急ぐひそやかに

— 雑 詠 —

帳尻も

底が見えたと会費言ひ

お役目も

あと百日と嬉しがり

眠気さす

時計をしつと睨みつけ



黒磯ロータリークラブ
チャーター伝達式

補装路を

百キロ菜の花も飛び

雑壇へ


顔見せが済み鐘が鳴り

久し振り
変つたところでロータリー
祝辞もう
沢山ですと猪口が待ち

ベタ賞めの
祝辞これからがマア酒とする

目をつぶり
話が長い祝辞なり

ようこそと
ほつ笑みかわす楽しい日



さらば次年度への
—バトン—を渡す

高遠な
理想へ笑いの手をつなぎ

国境がなくて
まん丸いロータリー

額縁を見上げ
別離へふりかえり

まんまるく
手に手つないで海を越え

なにやらん
笑いで終る例会日

鐘 一ツ
叩けばまあるい会となり



雑 詠

折に触れ時に当つて、例会々場や協議会などに出席した時のロータリー手帳の余白へ書きつけた句を、とりとめもなく走り書きを整理して拾い集めたのがそれである。

ロータリーは楽しい。毒舌家として、クラブから愛されて居るのは、川柳あつての事らしい。

それではなくては、ひと思いにつまみ出

されてしまうかも知れない。ロータリーアンは良い人たちばかりだ。だから私は気が楽で、悪舌を吐いて居る。気の置けない人たちに混つて、親しい友が幾人も出来た。而して親戚のように、おつき合いをして居る。

これらも、みんな気の置けない明るい気持の持ち主ばかりだからに違いない。

X

影法師
俺とお前と恋なし

入歯から
目からの老いを淋しがり

いやどうも
だけで話が筋に入り

パーティー

クリスマス

河童のこのこととして来る

魂が出張

この夜は虎となり

天国への乱舞
パッカスもくたびれる

キャンドルの灯に
女房天女ゆき

あるときの例会

微笑みを失くし

終会の鐘が鳴り

ゲスト皆

鹿爪らしく椅子により

逃げ足の

幹事へ太い枷をかけ

—— 炉辺会談 ——

友情の

橋へ明るい灯がともり



秋田市にて
一日講習会

— 部門別協議会 —

ビールツコ

酒ツコ親睦の妻と言ふ

会議室

お国訛りが親しまれ

105

深刻な

顔に『君が代』のロータリー

カウンセラー

こゝらが潮と壇を下り

東金チャーター伝達式

友愛の橋

東金までかゝり

菜の花を
囲んで楽しロータリー

認証のゼスチユア
お稽古も出来てゐる

身につけた
生気会場へ振りまわし

友情の橋は
雨から長くなり

山形市地区
アツセンブリー

屋上のかぜ
久し振り聴いて居る

クラブから
クラブへバナー笑みかける

ガバナ一の得意
雑壇に鎮座する

罐詰の二日
屋上で蓋をあけ

マイクから
ホールへ渦の国訛り

二日目のホタル
ホッとして歌い

君と僕
会議満足して別れ

協議会
「咲いた咲いた」から始め



さくらの家族会（追補）

— 矢吹酪農講習所にて —

お天気の

話もてる家族会

人妻と

お手々にぎつて悦に入り

ロータリー
童心で居るつゝましさ

みんなして
歌えば俺の声が消え

ガバナーの
気転あやふく身をかわし

家族バス
そとろに春を追つてゆき

老夫婦
目を細めてる七分咲き

蝶々を
うらやんで居る白髪染め

道標へ
落花ようこそと散りかゝり

一望のみどり
牛が浮き声が浮き

— 雑 —

デスクへも

蟋蟀秋の陽の間を縮め

誕生の匙

一本が拝まれる

銀の匙

嬉しい顔へ拍手する

微笑箱

匙追いかけてちとせしめ

ガパナーの

来る日へ頭よせ集め

英辞典

そろそろ垢がつき始め

家族会

妻を見直す日に出会い

あの方の

着物三万円の値を踏んで

よそゆきの

挨拶もぬきロータリー

個の奉仕

それではかろう委員会

新漬の

色さわやかに秋を噛み

楽しみを

分けて炉の灯に酒を酌み

カンター
例会の日をかこむ丸

例会のついで
病友へ花を買い

恩酬を越え
まどいのロータリー



例
会
風
景

好ましくない
と言うわけで一本例会日

欠席の
友を案じる目で出合い

手に手つないで

1. 手に手つないで つくる友の輪
輪に輪つないで つくる友垣
手に手 輪に輪
ひろがれ まわれ 一つ心に
おゝロータリアン おゝロータリアン
2. 手に手つないで つくる友の輪
輪に輪つないで つくる友垣
手にて 輪に輪
ひろがれ まわれ 世界と共に
おゝロータリアン おゝロータリアン

斎藤ガバナー公式訪問

(四〇、三一九)

ガバナーも
入れて例会のなごやかさ

例会も時間

静かに雪も降り

ガバナーの卓話

ほめられどうしうれしがり



嫁きし子への
— 祝 福 —

信じ合う

二人へ案ず暮しむき

はるかなる

思慕へネス公(思)の夜を騒ぎ

ふる里となつた
娘のあけ暮れへ洗濯器

別離とは
ほろ苦い味甘い味

盃を
置いて案ずる娘の喜し

明け暮れを
案じ合つてる泣き笑い

娘が嫁つて

お茶に淋しい日が続き

結婚の

記念売場へ必死の目

もう行くか
車へくもる涙の目

子のための
次代へ慈悲の金を積み

暮しても
馴れて便りは夢ばかり

炊飯の
出来へ細かい娘のたより

毎日が
幸福ですと娘の便り

お料理も
板についたと言つて来る

家計簿の
赤字を二伸へ書き添える

娘への便り

娘の為の
句にも淋しい字の乱れ

水加減
もう身についた娘の便り

淋しさの中に
嬉しい日を数え

娘の室に
もう居ない娘の香いする



— 組み終えて —

この小著は、極く狭い範囲で、殆ど全部がロータリークラブからの取材であるので、一般川柳としての観賞には程遠いのである。

従つて、この著はロータリアンにのみ笑つて戴き、而して楽しんで戴くと言う建前から編んだもので、チャーター・メンバーとして、六年の長い間、親しい仲間として、おつき合いを戴いたその時、その時のロータリー風物詩でもあると思つて居る。私の川柳仲間が沢山居るが、この著を見て

戴くことを、一応、遠慮させて戴いて、吾等のロ
ータリアンのみに贈る句集としたいと思つて居る。
改めて、巻を開いて見て、パーテーや家族会、
地区協議会、一日講習会などに出席して、見たり、
聴いたり、感じたりしたことが、その時、その場
のことが、ほのぼのと浮んで来たりして、懐かし
い思い出の数々が、浮んだり、消えたり、親しい
友の顔がひよつくり目に浮んで来るなどして、ロ
ータリーの思い出集となつた。

勿論、

川柳としての句の数々は拙いものばかりであつ

て、敢えて世に問うなどとは考えも及ばないし、
格調から言つても低いものとは、吾ながら恥入つ
て居るのであるが、それでも、ロータリーの在り
し日の姿を思い浮べて、楽しむ記録を残して置く
と言ふことも無駄ではないかとも考えたりして、
吾らの親しい仲間、ロータリアンと共に微笑笑し
乍ら、オイ！と肩を叩いて見たい。

一九六五年 四月

鹿之助 記

07

資料室

23

発行日 昭和40年4月1日
発行所 白河市寺小路45
著者 山中善五郎
電話 2206～
2224番
著者 川柳名(鹿之助)